

# 飛鳥寺の調査

## —第119-1次

### 1 はじめに

本調査は個人住宅の建て替えに伴い、明日香村飛鳥で実施した事前調査である。調査地は飛鳥寺講堂の東方で、東面回廊と東面大垣のほぼ中間に位置する。敷地内北東隅で東西15.0m・南北3.0m、調査面積45m<sup>2</sup>の調査区を設定した。2002年4月3日に調査を開始し、4月18日に終了した。

### 2 検出遺構

基本層序は上から①黒褐色土(表土10~40cm)、②灰褐色粘質土(床土20~40cm)、③灰褐色砂質土(近世の包含層10~20cm)、④明灰褐色粘質土(中世の包含層5~10cm)、⑤暗灰色粘質土(10世紀頃の包含層10~40cm)、⑥腐植土混じり青灰色粘土(10~30cm)、⑦暗青灰色粘土(20~30cm)、⑧暗青灰色シルト(10~40cm)ないし明灰色細砂質土(10~40cm)、⑨黒灰色砂土(30cm)ないし灰白色粗砂土(30cm)である。遺構は⑥の上面で検出した(現地表面より1~1.2m下)。⑧以下の層位には遺物を含まない。現地表面から最下層面までは、最深部で2.0mに達した。

検出した遺構は沼状遺構SX1050と護岸施設とみられる集石溝SD1051である。

沼状遺構SX1050 調査区内で最深部で約0.3mを測る浅

い沼状堆積。堆積土は⑥・⑦で、水流を示すような砂層堆積は認められない。調査区西端に西岸の汀線があり、そこから東に向かって緩やかに傾斜する。一方、東岸は平面では確認できなかったが、調査区東端下層の堆積状況からみて、調査区のわずかに東側であったものと理解できる。このことから、沼状遺構SX1050の東西幅は約13mとなる。南北方向の広がりに関しては不明である。

堆積土⑥・⑦からは黒色土器が出土しており、SX1050の埋没は古くとも10世紀を遡らない。また、後述する磚転用砥石は⑦から出土した。

集石溝SD1051 沼状遺構を切り込んで開削した溝で、幅2.4m、深さは20cm以上。その中に人頭大から拳大の川原石を集石している。集石は整然と並べられたものではなく、溝内に捨て込まれたような状況である。集石溝は北東に斜行しており、沼状遺構SX1050の汀線をほぼ踏襲するように開削されていることから、埋土が堆積して程なく新たに設けられた護岸施設であると考えられる。集石溝SD1051埋土からも黒色土器が出土した。

さらに調査区東端で断割り調査を行なったが、⑦暗青灰色粘土の下層には遺物を含まない砂層堆積⑧・⑨がひろがっており、飛鳥寺創建期に関わる遺構を検出することはできなかった。以上のことから、沼状堆積SX1050によって、創建期に関わる遺構面はすでに削平されていたものとみてよい。

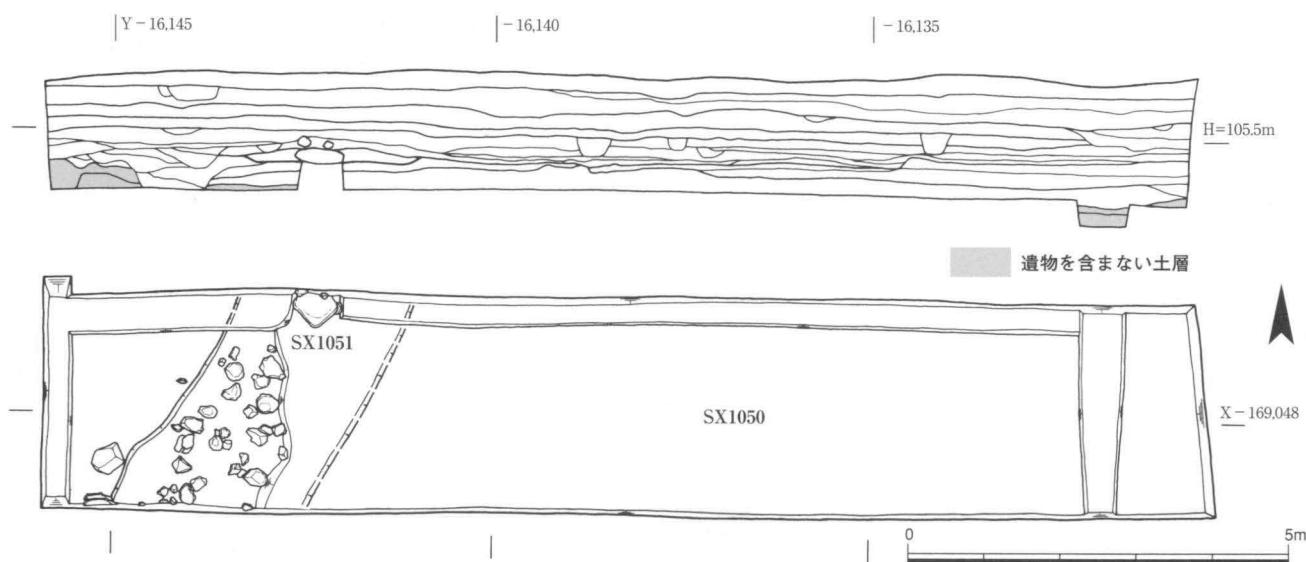


図101 第119-1次調査遺構図・北壁土層図 1:100

### 3 出土遺物

小規模な調査区にもかかわらず、多くの遺物が出土した。土器類は須恵器・土師器・綠釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器などである。特筆するものとしては、土師器甕の体部に「飛」を墨書したものがある(図102)。「飛」の右側にも同様の文字が認められる。下方にも、おそらく文字と思われる墨痕をとどめるが、「鳥」と読むには少し材料不足である。

瓦類は飛鳥寺所用の丸瓦759点(79.8kg)・平瓦3185点(276.7kg)が出土した。軒丸瓦は合計12点出土し、型式・種別がわかるものは、飛鳥寺Ⅰ型式が4点、Ⅵ型式が1点、XIV型式が1点、XV型式bが2点である。この他に鷺尾片も出土しており、飛鳥寺第3次調査、講堂北西部から出土したもの(『飛鳥寺発掘調査報告』PLAN15-38、PL.68-38)と、胎土・焼成が酷似している。鷺部左側面基底部の破片で、鷺部の幅は15cm。厚さは2.3~3.4cm。胎土には粗い砂粒を含んでいる。表面は黄灰色、断面は黒灰色を呈する。

鋳造・鍛冶関係遺物には、輔の羽口片や焼土、磚を転用した砥石(図103)などがある。磚転用砥石は長辺22.3cm、短辺20.3cm、厚さ5.8cm。長軸の四面を砥面として使用。磚の原形をとどめる箇所はない。側面の砥面のうち一面は研ぎ減りで大きく湾曲する。上面および下面の砥面は平坦で、溝状の研磨痕と刃痕が多方向にみられる。また、直径約1.0cmの半球形に窪む研磨痕が複数点在する。磚の焼成は硬質で、青灰色を呈する。本来、飛鳥寺所用であったと思われるが、時期は不明。その他には天理砂岩(凝灰岩質細粒砂岩)片が少量ながら出土している。

### 4 まとめ

今回の調査では平安時代以降の沼状遺構と集石溝を確認したが、飛鳥寺創建期および奈良時代に関わる遺構はすでに削平を受け、確認できなかった。

これまで寺域東辺部では小規模な調査が数多く行なわれているが、全体の状況は未だ判然としていない。今調査区の約20m北方で、奈良時代から平安時代初頭にかけての石組溝と瓦敷きが検出されており(飛鳥寺1987-1次調査)、今回もほぼ同じ深さまで掘下げたが、それらとの



図102 「飛」墨書土器 1:1

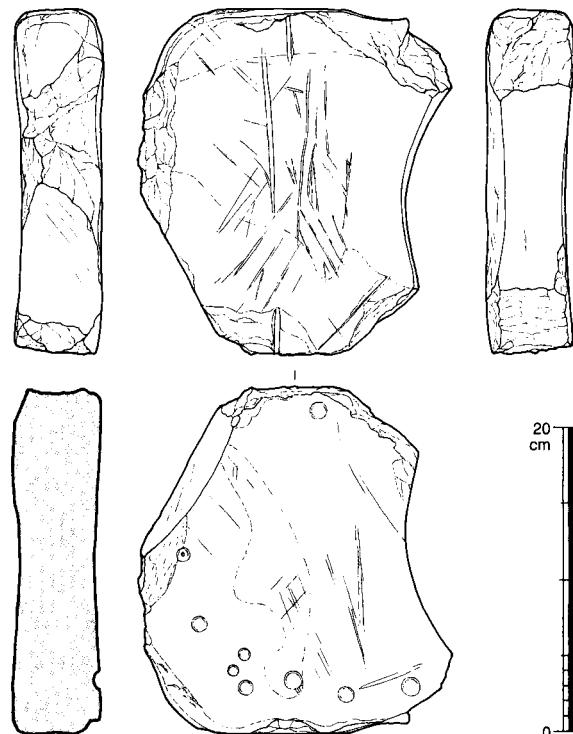


図103 磨転用砥石 1:5

整合性は見られなかった。

飛鳥池遺跡から北西方向は本来、谷地形が形成されており、流路や沼沢の堆積と見られるような状況は各所で検出されている。ただその検出状況が、いつ、どの段階のものであるのかを究明することが、飛鳥寺寺域内の土地利用の変遷を知るうえで重要であるといえよう。ただ、これまで小面積の発掘区での制約上、必ずしも明確に地山と確定できるところまで掘り下げることはできていない。今後の調査成果に期待するところが大きい。

(西川雄大)